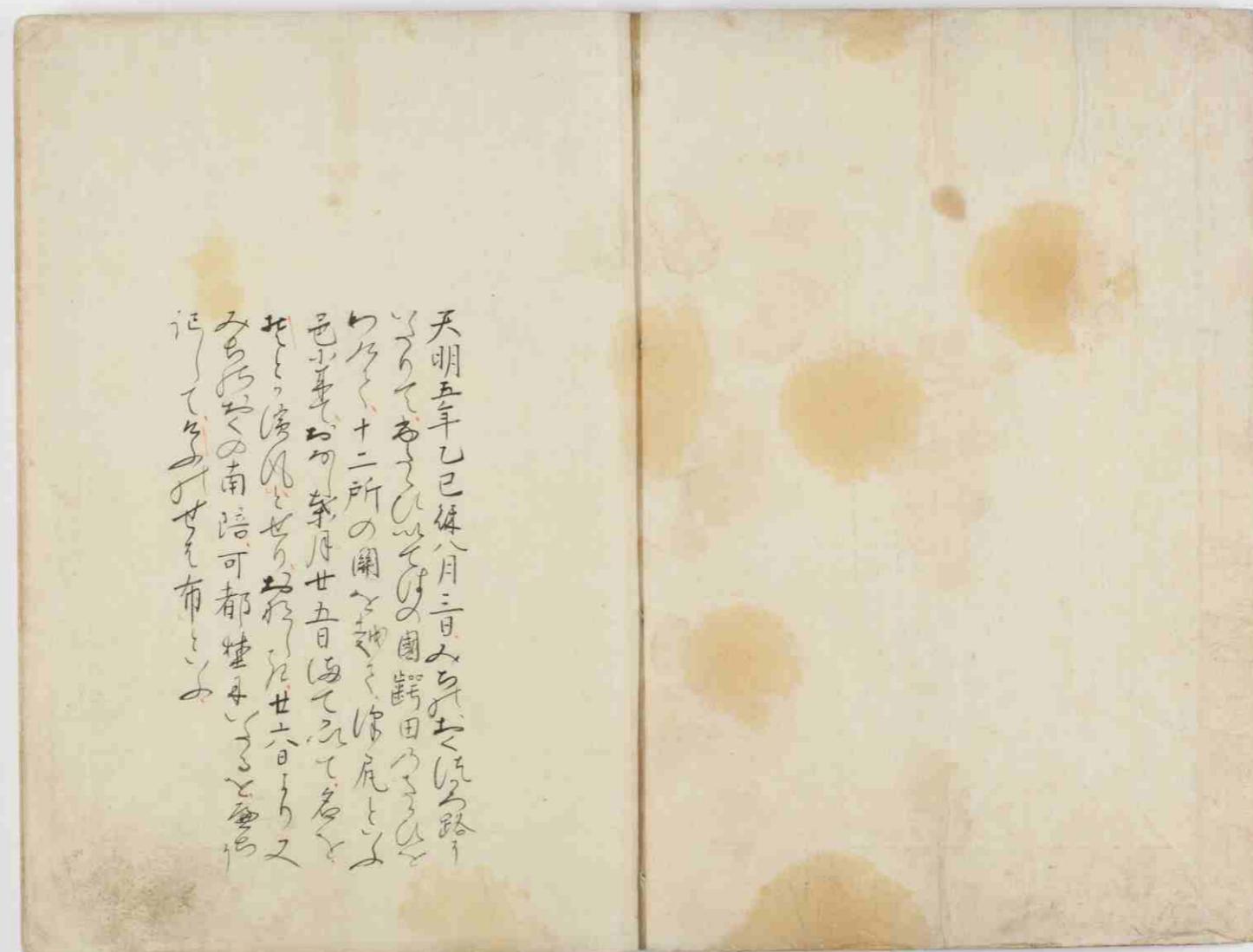
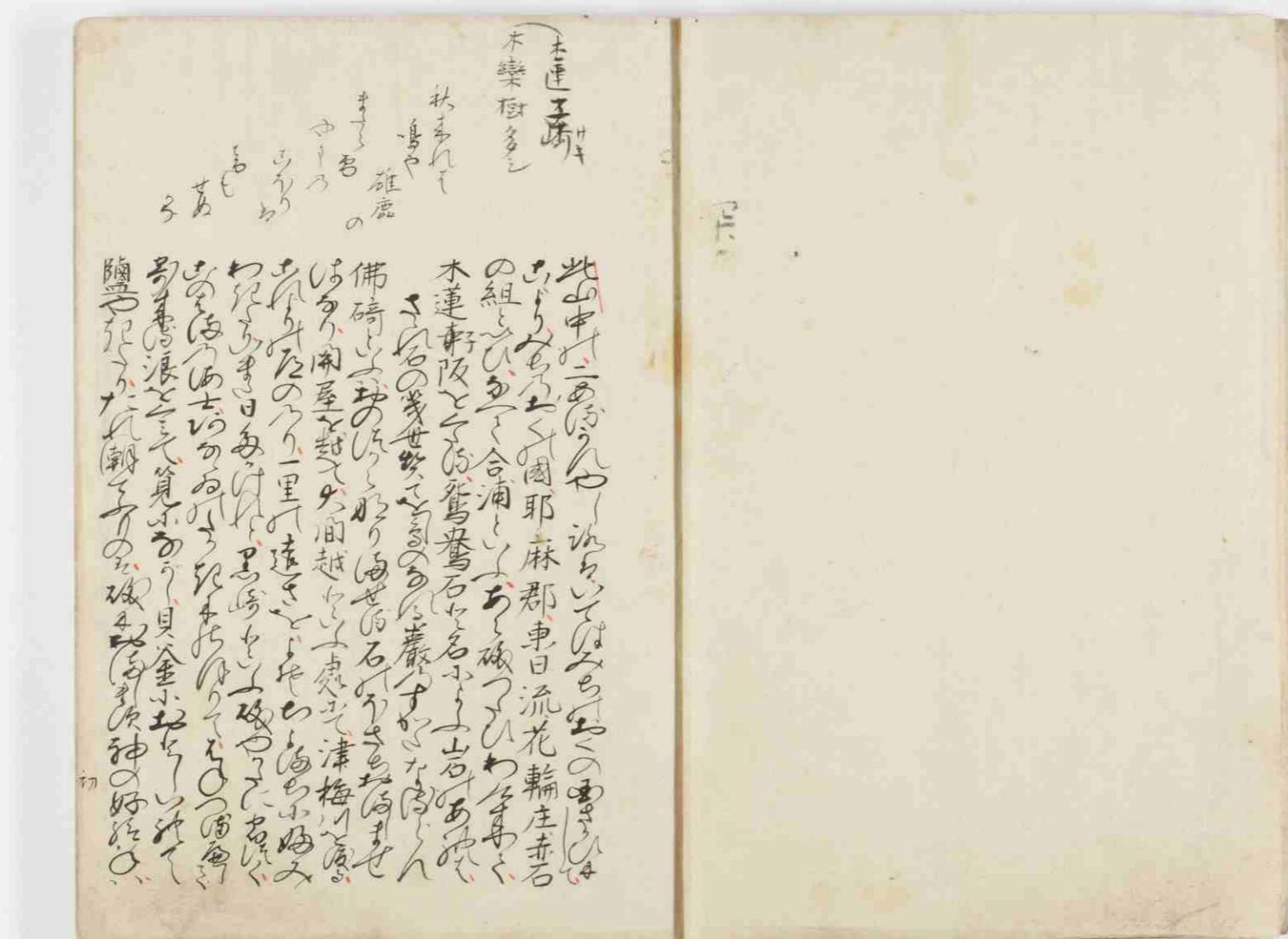


破損あり

以下 汚れあり

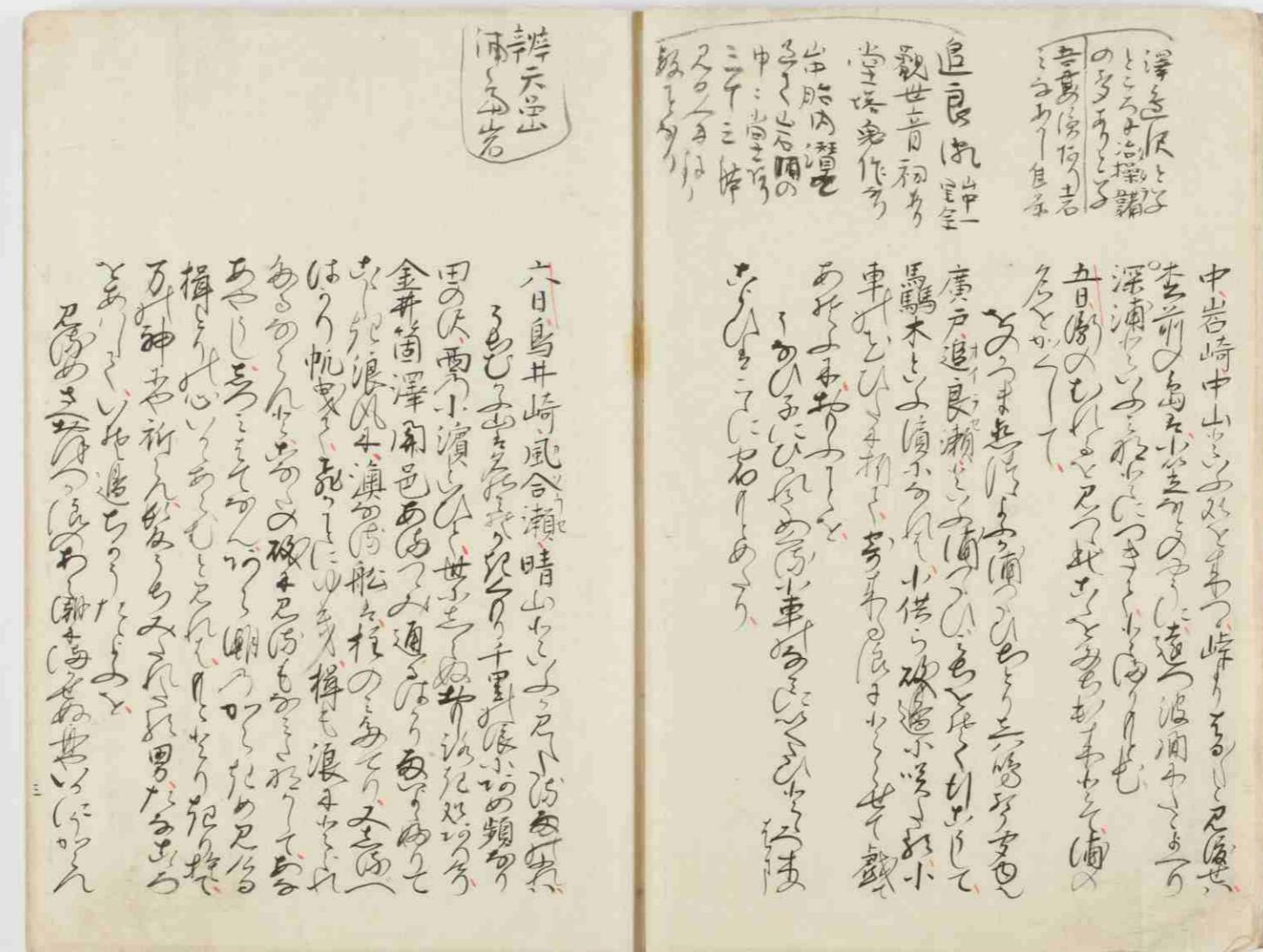


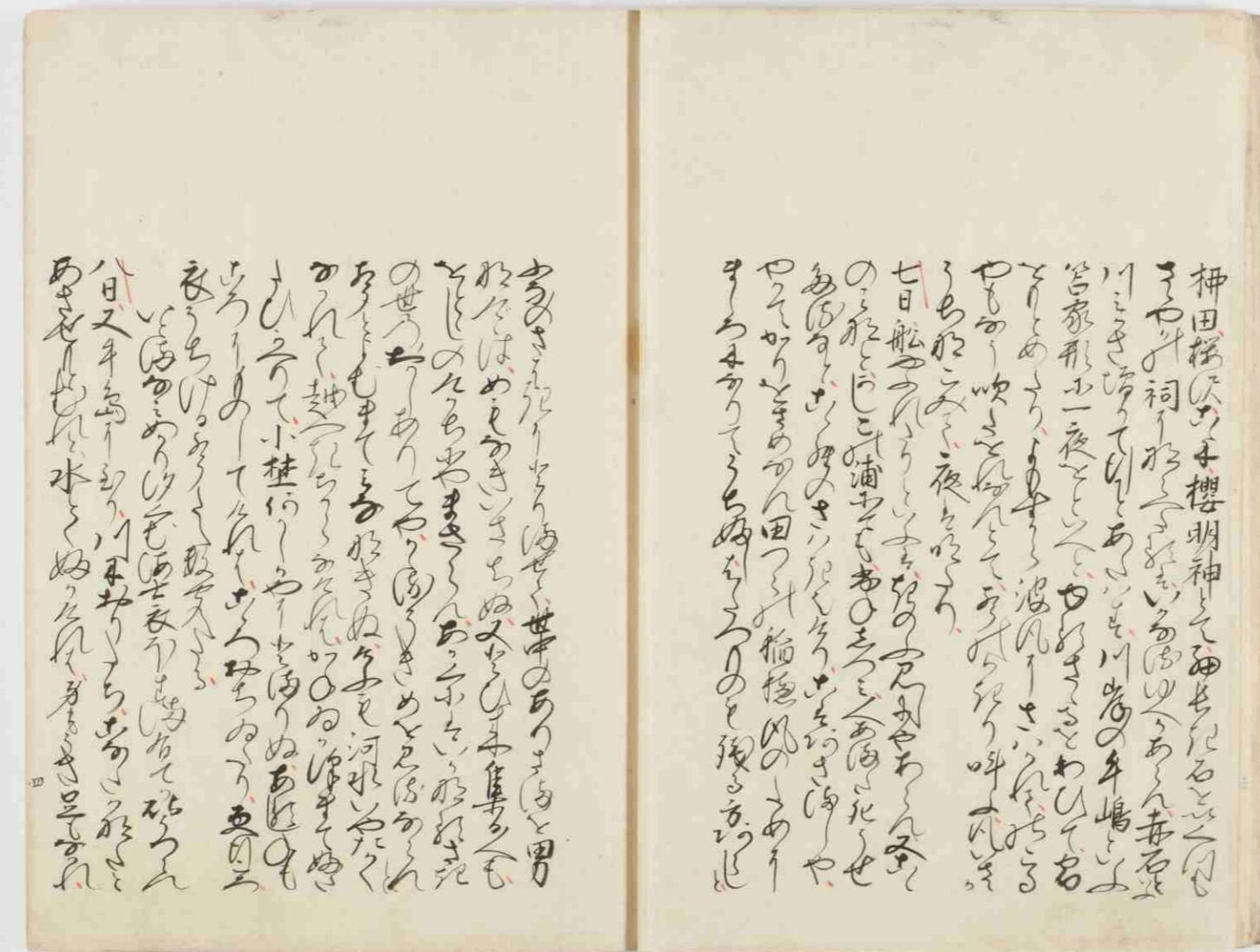




の舟は西行當ひるを出立すと、まことに
路傍を草木に覆はれて、この遠路はく
も終りゆくまでいまとぬりにほひてひ
あすひよもむかひつらう、くわくとす
まの年あきづきを度すと、嘆息する
森や山の中に、うの石立つる處の
竹の葉に繕ひて、腰つきめの小舟を、あらう
じゆくせんを、大河の岸に、ものまみれに充満
て遊らひて、上りと下りとねまゆる、神かひと
浪ひて、うなぎ、かきうる舟を、うら若狭川
ひひを、も濱香深流の國と魚へば、多て波未波非
ひの、あらそひ、當ひて、かく白せり、彦田溪

禮記注疏
言雲和名
文傳乃香
香草也





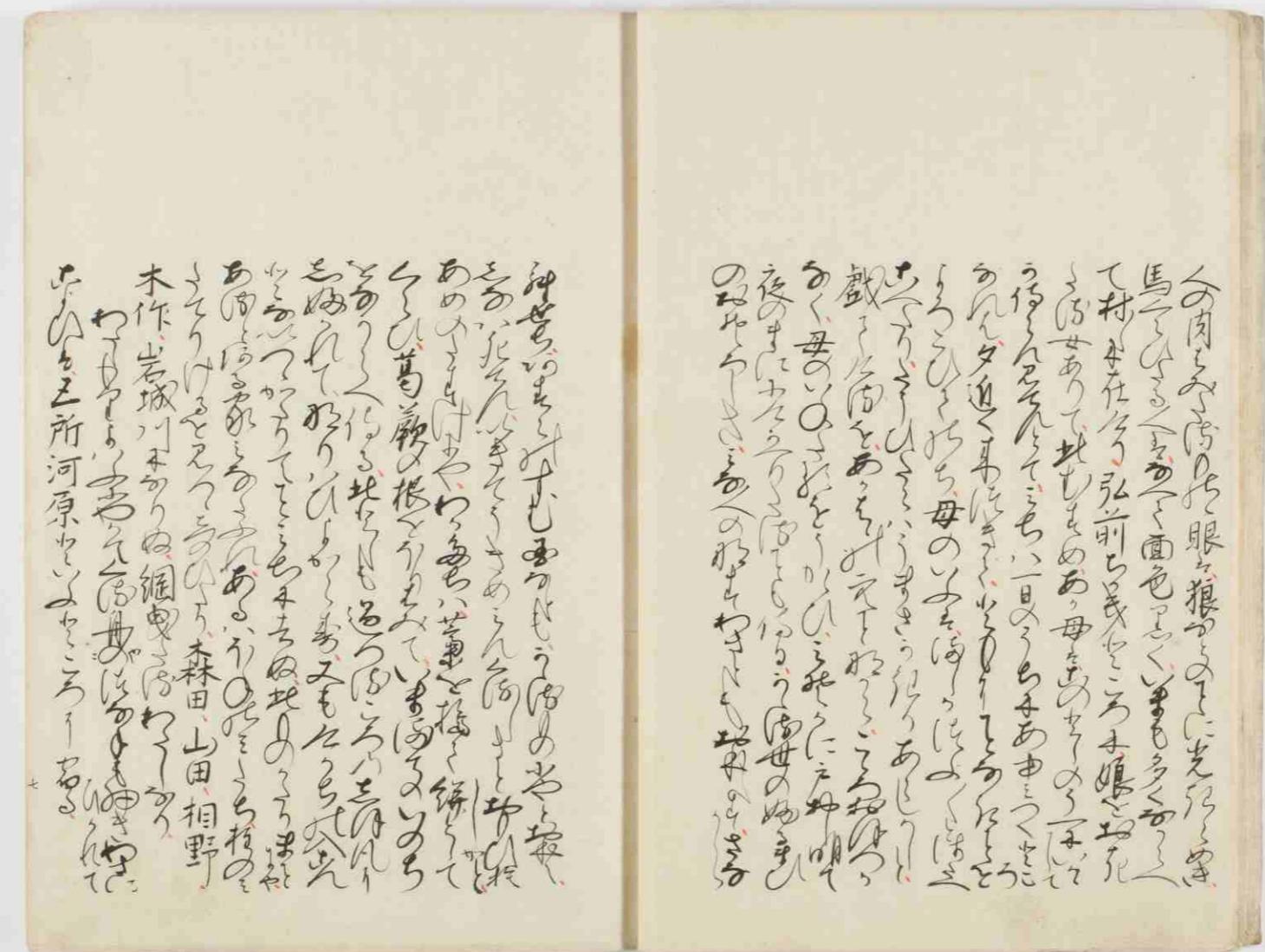
まわるに岩邊にゆき休めと旅(二ノ葉)
 の音をもてて漁舟してはまくらを
 あてもすらぬか漁舟隨のむちよお
 もうとものに持ててかじして年(いと)る
 せいかきさくわちて赤石色鱗(は)の塗
 つたぬれども舟(ふね)もあらばはづ
 まほとひよくて小舟(こぶね)もせね
 ぬ年(いと)で舟(ふね)の破損(はいそん)を
 あらむのあん
 九日(くにち)までひだりと舟(ふね)吹(ふき)て北(きた)
 の風(かぜ)のあらぬのまゝあれえびとまくら
 でもうし居(ゐ)ぬあらまの中(なか)よみがえられ
 まわるに岩邊にゆき休めと旅(二ノ葉)

金(かな)の舟(ふね)とあがめと波(なみ)と風(かぜ)
 甘(あま)い船(ふね)が高(たか)いのうす陽(ひのう)のうひのう
 銀(ぎん)の眼(まなこ)北(きた)置(おき)て手(て)と手(て)あせびとつ
 てりとくのうす
 川(かわ)舟(ふね)の舟(ふね)と波(なみ)と風(かぜ)
 波(なみ)と風(かぜ)と水(みず)と漁(うなぎ)と舟(ふね)

五

印之木床前の舟上もあはれ、雪むけ
 猛りあひゆるまほのうの音、すずめ
 ちとあおき山もくろいのうかくすむれ
 てに、唐世郎との生お居あひて、元
 あゆとひとりとやくせをそりゆみのゆきえ
 すゆや、とおこなひるのからひのこゑ、
 駄のそりゆき、辰のとよて、雪の半
 水のゆき、水のゆき、も故に、もやきうぬ
 路とおれりのゆき、之にて通ひ、
 わからてと夜の夕れ、むろむとすと
 おそれる、復すと、只の入るき、おきう
 がりやうき、おうき、とまか、とまか馬代

おととしの細とて、とまか、とまか、とまか、
 小方とて、とまか、とまか、とまか、とまか、
 おととしの草の根とて、とまか、とまか、
 おととしの馬の耳とまか、とまか、とまか、
 おととしの頭とまか、とまか、とまか、
 おととしの足とまか、とまか、とまか、とまか、
 おととしの骨とまか、とまか、とまか、とまか、
 おととしの手とまか、とまか、とまか、とまか、
 おととしの腰とまか、とまか、とまか、とまか、
 おととしの背とまか、とまか、とまか、とまか、
 おととしの身とまか、とまか、とまか、とまか、
 おととしの命とまか、とまか、とまか、とまか、
 おととしの命とまか、とまか、とまか、とまか、

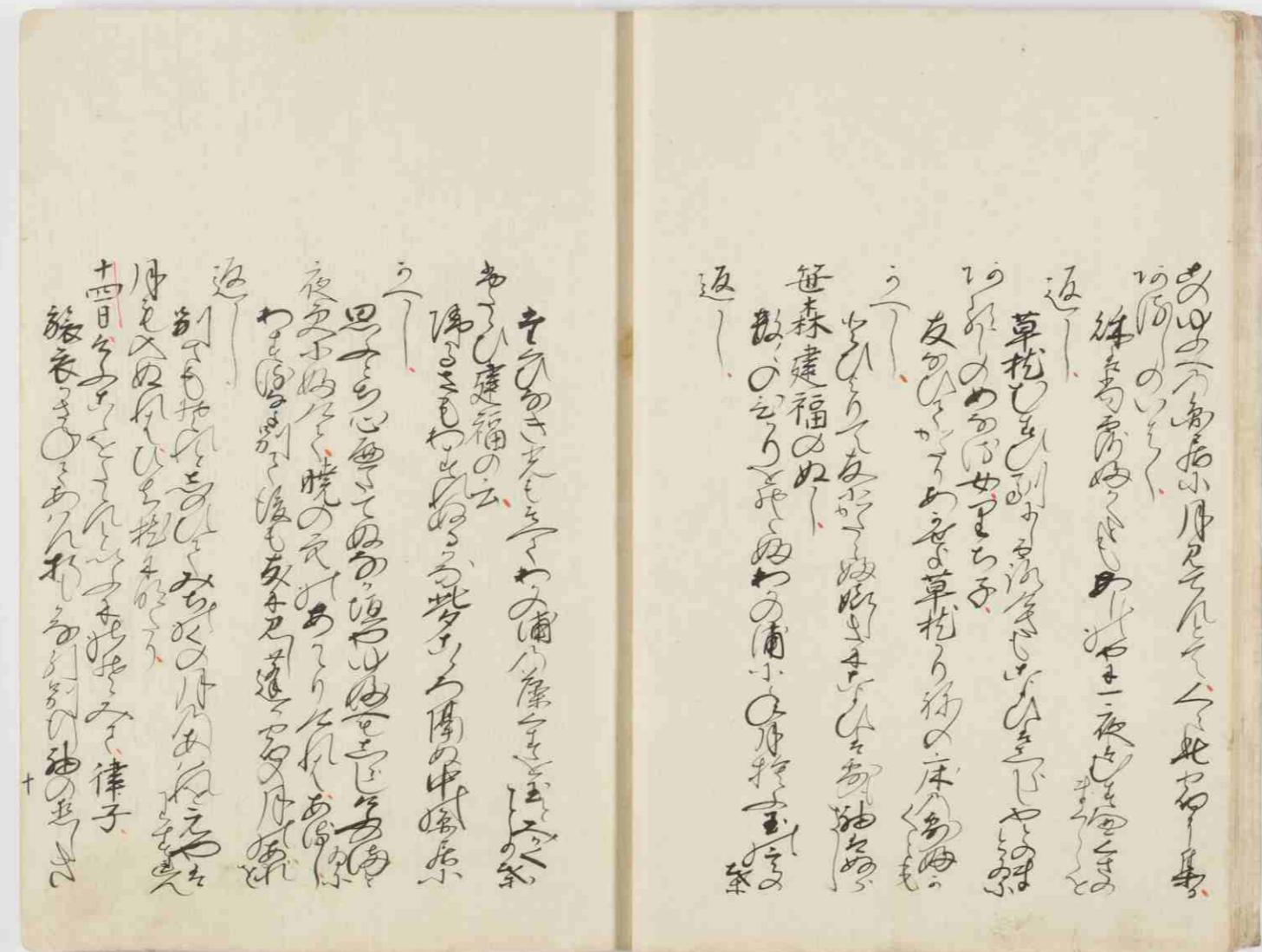


板屋本の
文字板

十一日未時より、龜田村霍田村より入る。事
て西行す。其の田の面積を方丈小町の例若
地山うちきの山もやうべ之谷地綿^{ワタ}を生む。其の山は
土をこしりて、土をこしりて、土をこしりて、
少々くゆらげぬ。磐城^{いわき}の北、雄鹿^{おろ}の角^{つのす}
とあはやうに、そのとくいとくいのとくいとくい
の山と阿曾邊^{あそへ}の杜^{のもり}をも。云々とも、田村の
大木^{おおき}をきりひきひきひきひきひきひきひき
大桐色^{おおぎゆきいろ}、小幡色^{こばんいろ}をも。蘿^{つる}が生む。生む中に
己の鳥^{みどり}をす。己の鳥^{みどり}をす。

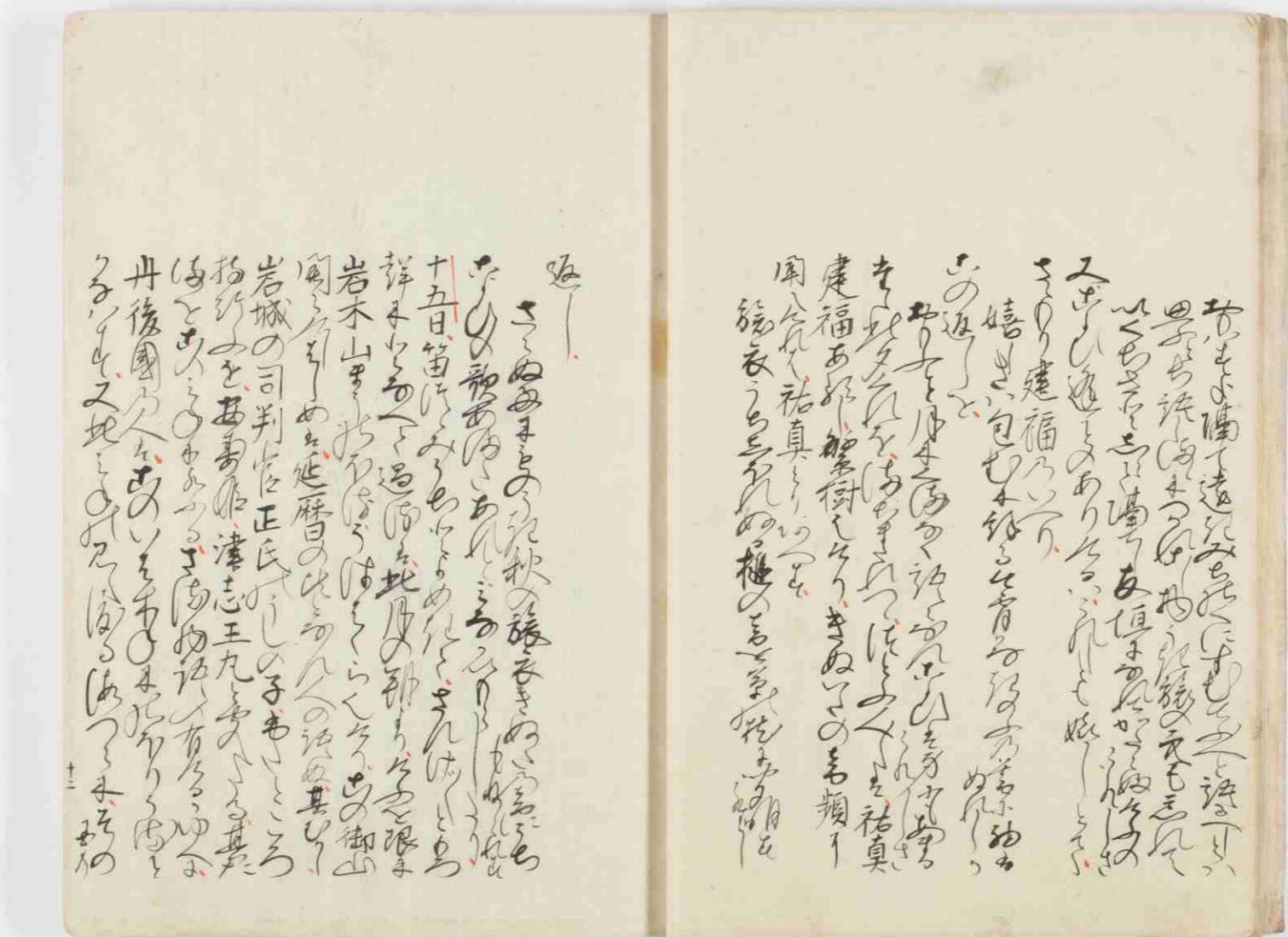
えやかきの神の御内侍やうれし。せうのまゆ
ありふやくまとう。虚空藏天子もひ先
まつりと。多羅天子とすえすら。采村天
木色の天子。地主天子とあともく。
夕者天子と身友天子と。氣代庵と。清風
をひむくめ。波の音うて風。さうら
うなぎのき。千里。そよごともうも。う
病の床もそよそよ。のあいにねり。ほ
お月のあられ。萬葉の方物。すりのわれて
樂。さくはのき。ひだり。よ多面後天佛
や。ま里。追つきよじて。猿崎。うづこころ
へやうのき方もの。真蓮寺と。親鸞

上久の御宿一泊して高野の宿
の湯飛去
十二日、山口にて百田邑と過る。名古屋
津輕郡永井村、美濃多治村あり。此地
色色とす。今朝のつる水邊の旅館、並盛り
の宿とす。大久保、梅平、和
徳、廣崎の里母子、華蔵寺の詣訪の
旅館とす。行宅の御門守ひ、
吉川惟足の御門守ひ、とぬえをひと
ぬえもすらとひだりて、神司山邊
行徳とす。もとすひまき、奇鳥長使
とあひておこなふ。
九
高野御宿、草枕山の旅館
返し、宿事より後旅館、房帳袖や唐物
ある。祐真の少く、
かみ浦のもの、波打つやまと、金も銀も
あり。高野御宿、
ある。松子子とす。おひがい満山の



返

石扇ももうとどきり浦のあらそにて出
はる。かくの御事。
かくの御事。浦の源を分けて北
尋ねて、美富山の向と人を見
て、船樹ひらく。
いのゆきもとく。お達せがともも
せよとて、三月十日(年)の春向と
おもひ。おれの旅の心をもと
寄りの重厚としも別ておれ
此よりの近い。在り。
今の様に思ひて、西行の名前ぢや

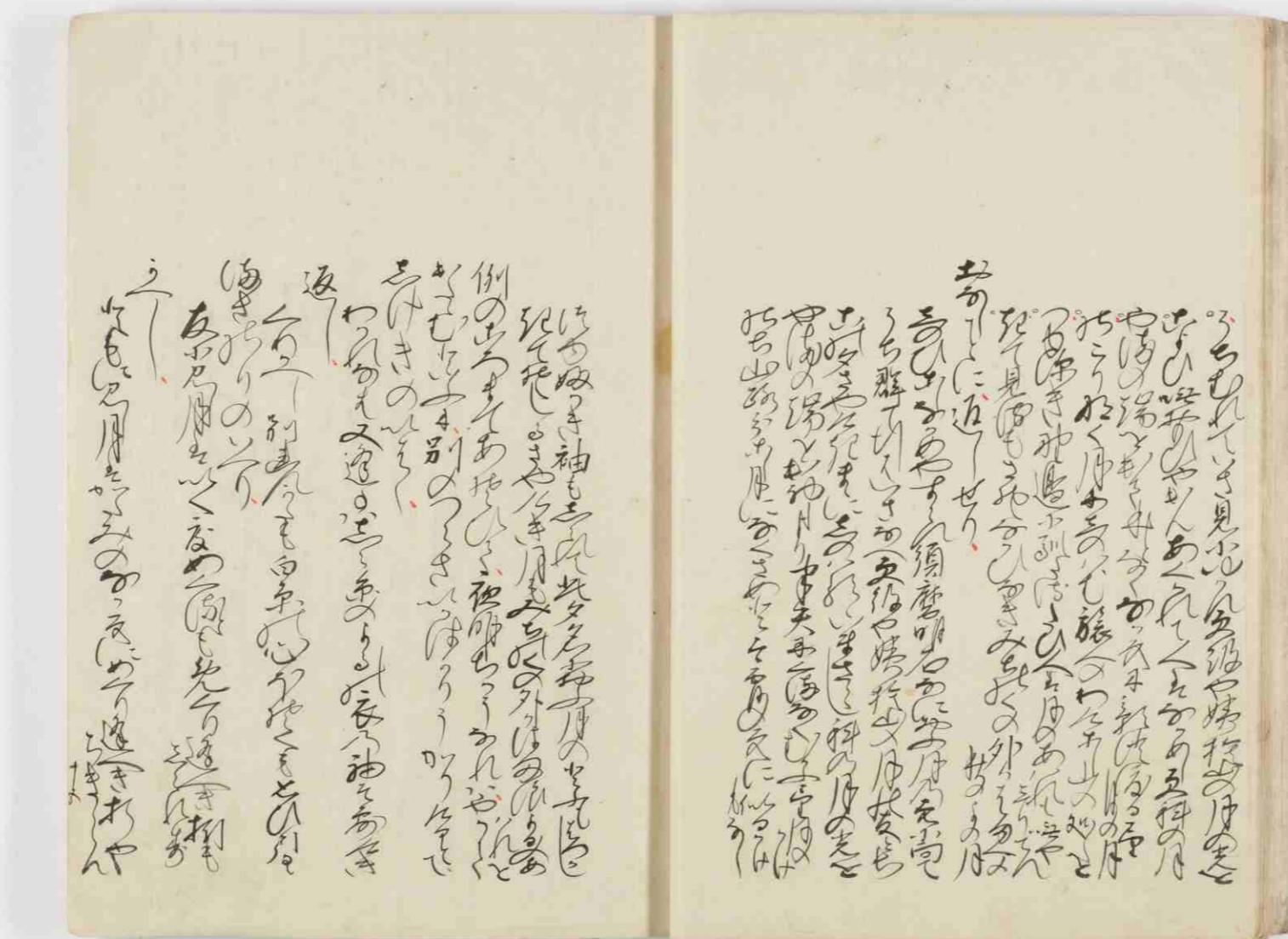


ある事もあつてゐる事もあつてゐる事もあつて
倉庫の洞ありて万字錫杖をも事との
鬼すみじう又多りの能くもれ煙を
うちねるもひそかにちらりおろ
龍泉寺と河口とある石邊日屋澤
の奥木闇門、瀧とて二十餘丈から葉
乃ぬ脚もうりやなほくのつて、名前が
ゆくと行徳の都、アヌスとて、まちを
うあわみて其やうの風、唐イボシくぬ
うちゆきの雨、半天をもておはの風は

祐真

第十九回
建福正來
繁木行德

又の心事は、後三月を度すと、西
里山中で、十五夜の月を、すとぞう
かくかくすに、お詠説りたる。
其後復数も、有名な詩作成し
由



建福

之起立也かとて是の序文すらも記す
 之處の文もあつて是の名を序文とす
 十六日立山行徳の云ふもとよりもあら
 えられりやと油のやうにすゑ
 立山の道を遠く隔もひくと源を天の川
 うるかがむゆもおどさ三の水を天に拂
 そめんあり立山の道を返
 や井路と立ち合ひて立山の道を通ひた
 まゝ、圓教院の三河の歌の儀心本
 祐真の、猿賀見の神へ上りしましてせたう

うちわのひれをやもに弘前と難高崎と
 路小まの皮の町おすの女蒲も浪も瀬せ
 市じやむ基すうをうやくひそめんこくのせ
 みゆきはまくらひもまつゆどくするゆ
 のくもかむるく

津軽野邊す

旅衣ともさとてそよぎのそよぎの
 あん祐真のよみてもあらすよ
 境垣村のあくせきのうすい体へんとけ
 舟りやくと藤崎の材かく筆娘のひく

十腰内を木末と
木末を下へてやうとせりて、三つに子祐
真云の舞はうと、十腰内を身からじ
鬼のうち、刀と鬼神太輔を世九腰あ
十腰を祀りて、其の材の名せり。又小
在と作す。つゝんひらかくん、又十面澤と
あり、嶋田山岩との顔べとく、四十石をも
あり、船をすとこもと、ゆひうてひら
くらむみを
ゆふれども、それを
えりて、船を引け、船をひき、人をまわし、
舟を、阿部のやう、義家をもせらむといひ

高の社の神は
箭持とひき流し山の尾の御嶽山とある
は御とひきとある
また猿賀山神宮寺
が正月朝ち村
うそとあ精進
うそとて七日参り
草鬼とてうそと
みたてつてうそと
人司弓とてうそと
其事とてうそと
ゆめ奥とてうそと
うそとてうそと
追子野木の材うそと
うそとてうそと
やまとくひのれうそと
うそとてうそと
絶トとま名をうそと
うそとてうそと
うそとてうそと

黒石の里木事つばく、齋藤行索をとぬる
をもてぬあらわされ石をうしもとひま
のよのうとくとく

返
到達する者の中の多くは小説家
等であります。併し其の外に
その他の文部省より認定された者
十七日行索へまわる。
遂に之を終結皮筋を以て之を
旅衣と號す。其の後此處の事務局の事務
を了めうる迄、

の御袖を着て一夜があつた。翌後
あらわに此の形跡がひまわりの美やめられ
て、棘部のあそびで傷つける男女とぞ山童も
歌わしむつりそく本うやぎゆる。彼等
衣と足下、まことにとく世三人被ふゆく
事あり。さうしてゆく。寶曆の比毛見甚
のまゆ。酒をすむとばとどける。本うやぎゆる
此ゆ。次第にとくひよのせす。うらむかに
自澤れおへぬあきゆじ下ひすら實尾
とひてとくひやうみけとくひすら實尾
とひてとくひやうみけとくひすら實尾
とひてとくひやうみけとくひすら實尾

返りよどきもすすむ村のものいは
がゆびと往きあひてそれ共ゆくは
ゆゑみづきうちにもうまめりはま
あらゆるものもわざるのみもわづれ
うもうちあつてもうゆきゆめとまちあ
のはをやありけしとほんあるの村の山
らるむ。田舎戸、高館、竹鼻、木合、喜
中埜と名高材下段の籬の中、すぢやの秋
の白葉子をもとぞ落さしにしゆめ見ゆれ
世主誰も是をそなへ錦地秋枝毛筆絵
行岳の材よりあそび日づく所とありしれ

もと見所をうながすの良園邊名松院
おみと旅へまよふ處とゆゑをもんじらぬとくう
うきつうひしる松、夜をすむとめすとぞれそ
かそとせよ身り、事半々もあらそくせん、文
もと縋つ氣とむかみの、松極ちゆと
ゆり多くそやさしくれ、中ややうとせう
す、足音はづく、河むらわらさん地の木に垂
きるかくはる、鳥すとよ、うづくまにゆく
せう、羊眼子みゆす、湯の小名はるいのれ
力すれりわらえよ、其のひに木の葉とてあ
ぬよろひをやかとて、溢ぐ事ありゆる、
是もとぞ、酒ぬりとうらをひせま

波是モ御主モアリシニシテ御子サツノハシニ
十日志左万浦石、又三久左志松の次山里
津輕坂と云ふ越後、工兵隊にて多々五年の
つゝ也。此の谷は、深くよ
炭焼藤太の次、すみ電乃と號り、而て漫
の山、着生の所、檣次檣内、檣六と云ふ
ありありとぞれ、通じる吉内邑も甚だ
残り多く之を以て地名を仙臺路もあり
これかくして、油川、新城、国町、大濱

喜和山善光寺
青森の漆山、奥山はうしやま、南部の岬
等へ鶴曾禮山を渡り、松前
の戸蝦夷の山へと入り、そこを西
へひきそりと風を吹き、又屢々
わからず十里ありて、とあわせゆくので、
達観崎中の潮白神の磯をもじらまづ洋潮と
めぐらしておひづるをばくの海を安瀬と呼ぶ
所、あるすり、アリ、家計を寄り鳥頭の宮
主の御子もお寺や風り、すこし善光寺
の御山背を立たれて、おひづるをばくの海を安瀬と
いふ。凡鷗小舟でとおりとうじうすがとよ
く、お島かく、雄碓島、じく北島と云う
いす。君より西へあらすじの海の御寺

十九日、高野道、有多年未井乃村にて
泊り、湯屋あり。浴びて、つぼと多く
ある。水をきよとす。男女とも多くある。
あらえ。おけむり。うそりとくらむと云ふ。
とおれ。ちとせん。此の地の水をキム。さう。
けむり。水をかく。海にてくすりとけむり。
水をかく。水をかく。年々くわたり。
うきかく。身をもとよし。身をほめり。
かほそく。われらは人をもとよし。
かほそく。われらは人をもとよし。
やうりと。濱田、荒川と。大豆坂と。

		大糸 温泉
大糸川上り アゲハチ アゲハチ アゲハチ	阿闍羅山 大糸川上り アゲハチ アゲハチ	大糸 温泉
虹根村 早川村 名池	蛇石 蹠石	大糸 温泉
奥羽 奥羽 奥羽	石塔 石塔 石塔	大糸 温泉
上蓋二丈五尺 下蓋二丈八尺 周圍廿五丈		大糸 温泉

夏の日麗人せうて秋味手ほりのく絆
松が身なり、さあらに身をもれめに
あるらむ紙うしゆをうるはるる姓の音
実可半もあひあり、碇の間手草りいろ石と
いふ石あひゆふせのそをせうぬのせう
旅へとくわくわくわくわくわくわくわく
山國寺不動尊をほりてかれてく身
つづきもせん屋ノ新ウカニ奇々わくわくと
やゆて、かくかくかくかくかくかくかく
國とくとくとくとくとくとくとくとくとく
里手うりてりてくとくとくとくとくとくとく
うりてりてくとくとくとくとくとくとくとく

○樹木村
○石礫溫泉

家を出も波の國を走りて、朝も夕
日も夜も波の國を走りて、長野より北へ、わざ
かうと、國の外へ出でたり。二
廿二日、石垣山へ登りて、越後、新潟を
郡へまわる。そして、白河庄とおもての
名前をもつての大木、それゆかさまである。
あひ、上りの風はむくむく吹き、松一本とあち
柵にてまづひる、津軽、秋田の木の高木
せたれあつて、細葉と、前立峰の丸曲なり
そそく、あひひちの國を走り、陣場やぶみと
並んで、國を走り、長走村とす山里の方へも
衣ふる毛皮を身にまとう。

無人
齊明帝五年三月遣阿陪臣名率
船師一百八十艘討蝦夷國阿陪臣簡集
飽田渟代二郡蝦夷二百四十一人其勇
三十人津輕蝦夷一百十二人其勇四人
膳振鉏蝦夷二十人於一所而大鄉食賜
祿即以船一隻與五色絲帛祭彼地神
至肉入籠時問菟蝦夷膳鹿島菟穗名
人進曰可以後方羊蹄為政所焉隨膳庶
島等語置郡領而歸トシタハシテ此の
邑今有之可也而口口口口口口口口口
又云松前の島ひくのを代乃國子立也

西の風ぬくひの易人多くすり傳
事にかりてもいあきこむつぬのやこのかと
給ぬ人の爲め男せうてづけさりとまゆ
生てほ族人を余がんれけてほも
リうひ事生すありそしのじ傳とひてお
ちの佛國路ナニキ手錢セラセアリ
白澤釋迦内大龍子等新湯スルまつ
葛うづ根王とたかくとあらわすとまえ
種休ヒトツのぬめりのりに綴子ツバメま
村をとれどとく一者シテおもとみ蝦夷の
ノノ蝦夷とおのねくそはもをのま

山あうを過すと水を下さしめと、りそよふ
ぬ風、まく風、うれしとてとて、一里村
のやうに、米白川と舟をひきて、岩を
扇田や千里の水をあらへて、灰をかりる。ま
ゆのそりをさるがりて、にあらてぬ、
おとづれ入る暁の月影をさす。草の
ゆかしきあせり。
そのゆき名はりて、草の花すて、
廿四日あつたむの夕風、路も、風も、大麗色
と見、湯泉村、十二所の名あつて、朝と朝と
次尾と、山中にあると、もし、大村、いそげの
ゆかとさすと、



破損あり

